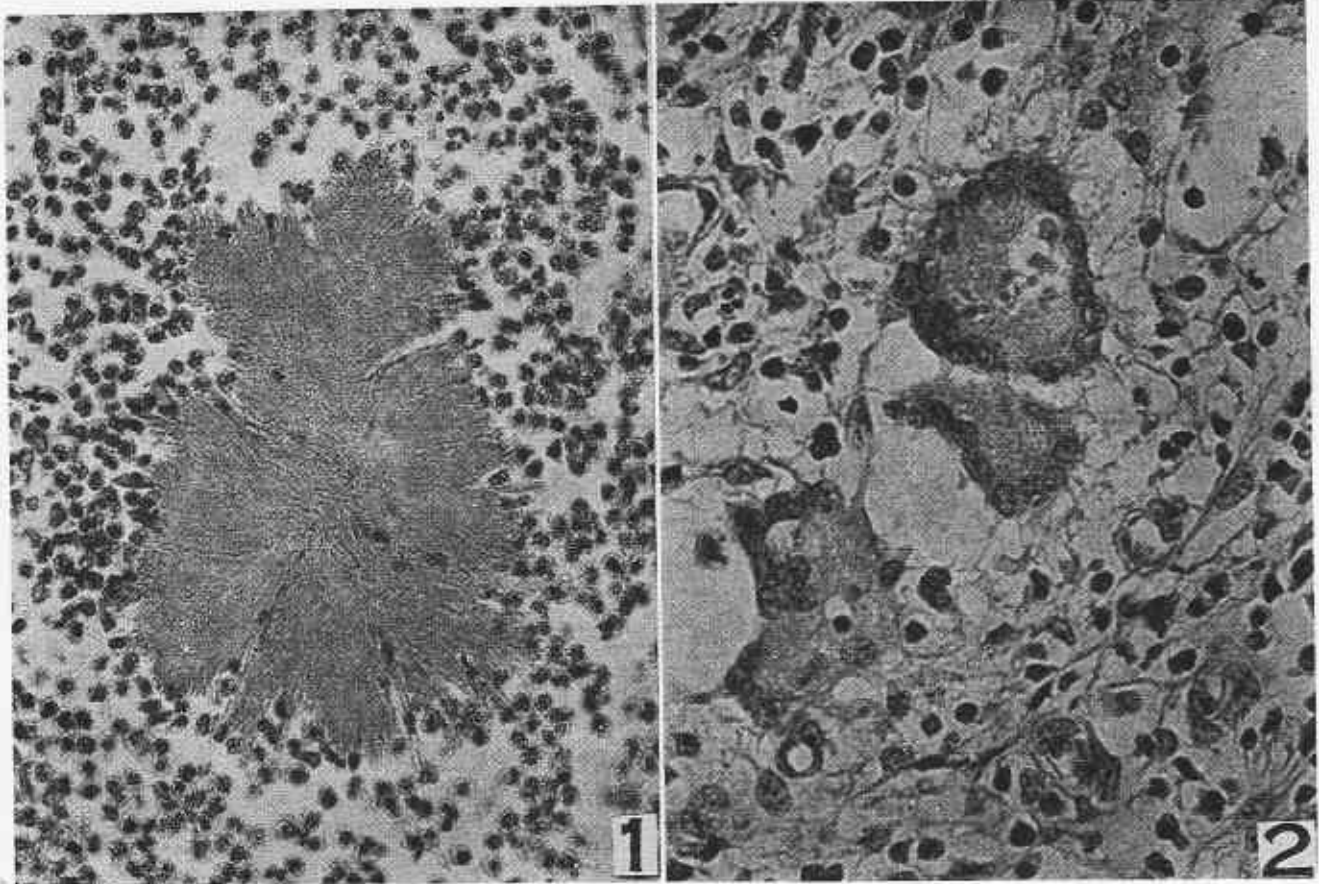


## 牛の鼻腔内腫瘍物

日大農獣医学部獣医学科病理学教室出題・第3回獣医病理学研修会標本 No. 34



牛の鼻腔内腫瘍物については宮崎県農業共済組合連合会の山田氏が臨床上種々研究せられておるが、その一例の材料を提供せられたので、その組織学的病像を検索した結果を報告する。

本材料は宮崎市の中山清一氏所有のもので和牛、牝、昭和35年5月生で昭和36年2月頃から鼻笛音を発し近隣の人達が安眠できぬほどの騒音を出したということである。翌37年4月頃鼻腔から膿様物を漏出し、左右鼻腔内部約10cmの部位におのおの苔状の腫瘍物を認め、鼻腔は狭窄し、診断の結果手術不能と決定して同37年5月30日廃用としたのである。

送付を受けた材料は腫瘍物2個と鼻粘膜の一部である。この腫瘍物の左右は不明であるが一側のものは不正球形（直径約2cm）で他側のものは扁平鳩卵大（長径約3.5cm 高さ1cm）に突隆し、表面に多数の小孔を有し多少顆粒状を呈しておる。なお一側腫瘍物の後方5cmの粘膜面に粗糙部が見られる。

組織標本（H.E 染色）の所見としては粘膜下は多孔性となり、組織全般にわたり顕著な好酸球の浸潤があり、その他線維芽細胞・リンパ様細胞・プラズマ細胞・巨細胞が認められいわゆる肉芽組織を形成し、この間に極めて少数であるが放線菌塊に類似のエオジン好性顆粒が存在する（図1、×400）。

しかし放線菌病巣に見られるような好中球の浸潤や病巣を取巻く線維層も極めて少く、特異とするところは前記の好酸球の顕著な浸潤と所々に巨細胞が見られることである。なおこの巨細胞については詳細に検索したところ胞内に球状物と菌糸状物が認められた（図2、×500）。

以上の病変から察するにアメリカで Bridges や Roberts 等が報告しておる *maduromycosis* に類似しているように思われる。目下培養を進めておるが果して氏等が病原体と認めておる *Helminthosporium* によるものであるかどうか山田氏と共に検索中である。